

書評

早坂隆著『評伝 南京戦の指揮官 松井石根』

久野 潤（日本経済大学准教授）

著者はノンフィクション作家で著作多数、『ジョーク集』シリーズが累計100万部を突破しているほか、近年では支那事変・大東亜戦争期の陸軍軍人を再評価する評伝、その他スポーツ関連の著作に定評がある。本書は著者が平成23年（2011）に出版した『松井石根と南京事件の真実』（文春新書）の復刻版であり、原書執筆の際に取材した島田親男氏（南京戦に参加した元兵士）の、「なぜ戦後の日本人は中国人の言うことばかり信じて、私たちの言葉には耳を傾けてくれないのでしょうか」という「遺言、が、改めてくまえがき」に記され、著者の問題意識の一貫したところも改めて確認できる。

公刊された松井石根（以下「松井」）の評伝はさほど多くないが、戦後に発刊されたものは「日本のヒットラー」（本書表紙より）というイメージを払拭しようというのが主である。たとえば、松井の副官だった角良晴の日記を発掘した早瀬利之による『將軍の真実』¹は、「今日、アジア諸国が栄えたのは、アジア解放運動を続けた最後のインテリ將軍、松井石根の存在があったことを、忘れてはならない」²「日中戦争、なかでも中支那方面軍司令官松井石根將軍を理解するには、歴史を正視する必要があります。第二次上海事件を引き起こしたのは、中国軍による非武装地帯への侵入と大山大尉射殺（東京裁判で判明）事件が決定的なものでした。また南京事件は、上海戦の延長上にあったのも事実でした。このことは松井石根自身が東京裁判で述べています。しかし、こうした事実を書くこと、発表することは、大変な勇気が要りました。あまりにも、A級戦犯、なかでも松井石根への偏見が強すぎ、右翼というレッテルを貼りつけていたからです。東京裁判の終止から五十年をすぎた今も、歴史の認識が改まっていません」³と主張している。

他方、思想的な側面から大東亜戦争を論ずる研究の中で、たとえば松浦正孝が「世界大恐慌および満州事変以降、汎アジア主義というイデオロギーが強くなり、様々な要因によって増幅され、日本帝国を『大東亜戦争』へと導いていった」⁴という視角から、大亜細亜協会会頭だった松井をその焦点と見なし、極東国際軍事裁判（以下「東京裁判」）が松井の汎アジア主義には一切触れなかったことを指摘しつつ、南京攻略直前の松井が「上海からの抗日性の徹底的除去と外国への周知」「占領地民衆の宣撫工作」の必要を強調し、蔣介石政権に対してあくまで強硬であった⁵側面を指摘している。松浦は、日本側の「支那通」と中国側の「日本通」を対置したうえで、「松井ら日本の汎アジア主義者は反英主義をとり、『アジア人によるアジア』を唱え、連省自治による中国の分割をめざし、台湾を拠点に『南支那』の西南政権に大亜細亜主義による連携を呼びかけ、英国などの市場・植民地であった『南洋』への進出を推進し、政治と経済にわたり日本を盟主とするアジア秩序を形成しようとした」一方で、「王芃生ら中国側は、インドや『南支那』『南洋』を通じて英国と提携し、日本によるアジア地域の植民地化という汎アジア主義の矛盾を突き、中華意識に基づいて『強い中国』の復興を唱え、中国を中心とする『王道』によるアジア秩

序再編を目指した」⁶という対立構図で捉えている。

また野村幸一郎は、「松井が信じた『大亜細亜主義』という観念は、地理的、歴史的、文化的、言語的、その他さまざまな伝統にもとづくアジア諸国家の『国民的境界』を横断して、ひとつの全体性を形成するには、現実領域における裏づけに乏しいものであった。そして今日から見れば、このような『大亜細亜主義』の観念的性格は、最終的に松井の理念を裏切る形で、彼を深刻な失意と悲劇へと導く結果をもたらすことになった」⁷「たとえ、松井自身が善意をもってアジアの民の救済を訴えていたとしても、彼が率いる日本陸軍は、国家の成り立ちにおいて、異なる人種を法的保護の対象と見なさない『皇国民』を構成員として成立している『皇軍』であった」⁸と評し、大日本帝国という戦前の国家そのものに対してと同様、松井の思想に対しても否定的に見ている。

本書は著者独自の取材・調査成果をもとに、従来の学術研究では捉えきれなかった松井像を提示し、同時に大東亜戦争や日本陸軍に対する半ば固定化されたイメージに再考を求めるものである。

本書〈序章〉では、松井が他のいわゆる「A級戦犯」死刑囚と共に巣鴨プリズンで昭和23年（1948）12月23日に処刑される模様が、分刻みで描写されたうえで、〈第一章 日中友好論者への道〉の導入となっている。すなわち、「日中友好論者」であったはずの松井が、皮肉なことに「南京大虐殺」の責任者として処刑されたということが、最初に印象付けられることとなる。

〈第一章〉では、松井の生い立ちや軍歴を追う中で、その思想形成における川上操六（「日本軍の存在理由は東洋の平和確保」）や荒尾精（「中国を強国として改造」）、宇都宮太郎（「欧米帝国主義に対するアジアの共存共栄」）、そして孫文（「大亜細亜主義」）の影響について触れる。そのうえで、中国側の排日運動と併せて昭和2年（1927）の「南京事件」という非道の責任を「蔣介石ではなく共産派にある」とした、松井の「中国の共産化」への憂慮について言及されている。これは松井が張作霖を「反共の防波堤」と位置づけていたことの指摘と併せて、現在に続く中国（共産党政権）や日中関係の問題を考えるうえで示唆的である。そして済南事件での国民革命軍による日本人居留民殺害について、『済南事件邦人惨殺状況』より「腹部内臓全部露出せるもの、女の陰部に割木の挿込みたるもの、顔面上部を切落したるもの、右耳を切落され左頬より右後頭部に貫通突傷あり全身腐乱し居れるもの各一、陰茎を切落したるもの二」なる描写が引用されているのは、〈第四章 南京戦〉で取り上げられる「大虐殺」の存否を論じる際の一つの伏線かと、察しの良い読者は気付くであろう。

松井の生涯において、「南京事件」に次いで論点となるのが、〈第二章〉で取り上げられている大亜細亜協会、そして論文「亜細亜聯盟論」である。松井の入会で、拡大路線へ転換した汎アジア学会が発展して、昭和8年3月に発会した大亜細亜協会について、著者は「あくまでも欧米圏に対するアジアの『対等』なる関係の確立を目的とし、単純な反欧米論に終わっていない点に留意しておくべき」「国内外への様々な影響を考慮し、同協会は『文化・思想団体であって政治団体ではない』と自らを規定したことも、注目すべき側面」（69頁）とし、『「欧米列強に支配されるアジア」から脱し、『アジア人のためのアジア』を実現するためには『日中の提携が第一条件である』とする松井らの『大亜細亜主義』が、

いよいよ本格的な公開へと船出した」(69～70頁)と評する。そのうえで、同会発会と同じ月に発行された『外交時報』第679号所収の「亜細亜聯盟論」について、著者は松井が欧米主導の国際連盟よりも「地域ごと」の諸問題解決を志向していることを特記している。これは往時の国際連盟のみならず、現在の国際連合の将来を考えるうえでも重要な論点となろう。また大亜細亜協会が同年5月に発行した『大亜細亜主義』創刊号に松井が寄せた「支那を救ふの途」の内容を引用しながらの、「松井は、国民党政府の存在が『中国のためにならない』^(ママ)ことを感じ始めていた。このことは、その後の松井の行動を規範する一つの強い信念となっていく」(73頁)という指摘も重要である。戦後歴史学界では「日本による中国侵略」ばかりが強調されがちだが、国際連盟委員会で敢えて人種的差別撤廃提案(大正8年)を示した日本と比べ、国共内戦中である事情を差し引いても、蒋介石こそ欧米主導の国際秩序を固定化させるような対応をしていた側面をもっと顧みるべきであろう。この辺りは、「かりに松井が本気で実現をめざしていたとしても、上海派遣軍司令官として、軍事力による首都占領や権益の保護を企図した事実、今日から見て、彼の理念とはやはり矛盾している」⁹「松井の『大亜細亜主義』は、同じ理念を共有する者にとっては実現すべき政治的スローガンであったが、帝国憲法下にある臣民やこれを母胎とする皇軍から見れば、アジアの諸民族派は法的保護や友愛、関心の対象からは除外された存在であり、ましてや『一族』や『家族』のみを『同胞』と見なす中国民衆から見れば、アジアの『同胞』という発想自体が、彼らの感覚からはあまりにもかけ離れたものであったことになる」¹⁰といった、従来の「学術的」議論では理解が及ばないところである。

〈第三章 上海戦〉は、南京戦の前提たる日中全面戦争が勃発するところから始まる。予備役だった松井が呼び戻されて上海派遣軍司令官となる前の通州事件に紙幅を割く理由は、読み進めるうちに理解できる。というのも世論の激昂や、当局の「通州事件の再来だけは回避しなければならない」という危惧(97頁)が、上海派遣軍の編成および出兵につながっているからである。中国との全面戦争の意義は、松井にとっては「第一義的には『蒋介石の独裁』を倒し、中国の『共産化』を防ぐことである。そして、『親日的な中国』へと生まれ変わらせ、日本と中国が友好を深め、その上で欧米の支配からアジアを取り戻すことである」(109頁)と。その後の日本側の兵力増派についても、この文脈から見なければならぬ。そしてその増派された第十軍が杭州湾上陸作戦を成功させた一方で、その独断と陸軍中央の追認により、松井の意図せぬ形で南京戦が発生した、歴史のもう一つの皮肉に読者も触れることになる。

〈第四章 南京戦〉では言うまでもなく、そこから展開される南京戦について詳述されている。当時の従軍記者や論壇人の言葉から、南京戦が「欧米に搾取され続けてきたアジアが、それまでの歴史を刷新し、新たな時代を迎えるその第一歩」(159頁)と期待されていたという同時代的感覚は、単純な〈中国＝被害者〉史観に囚われては想像もつかないであろう。戦闘自体の詳細については本書を実際に読むことを勧めるが、改めて一点考えるべきところがあるとすれば、歴史認識問題として(昭和2年の「南京事件」でない)こちらの「南京事件」を提起された際、今の日本人が南京戦の顛末を端的に説明し、かつ客観的な評価を述べるができるかということである。松井は実際の南京戦でも「降伏勧告文」の通り、文化財の保護保存を徹底して実践し、孫文の中山陵だけでなく、明孝陵や中国軍に「軍事流用」されている靈谷寺に対してすら攻撃を禁止した。そのため著者が記す通

り、「砲撃が制限された前線の部隊では、思うように作戦を実施することができず、熾烈な白兵戦の結果、日本側の犠牲者がいたずらに拡大するという事態を招いていた。当然、松井に対する不満を感じる者も少なくなかった」(167～168頁)。つまりこうした史実を基に、莫大な死傷者が予想される交戦国の首都攻撃にあたって、日本軍がハーグ陸戦法規をはじめ国際条約を遵守し続けたということを、いまだ大勢において主張することができていない我が国言論空間の偏向を、評者も思わずにはおれない。

なお著者は日本軍について手放しに礼賛しているわけではなく、南京戦最中の昭和12年12月29日の松井の日記を引用しながら、「軍紀の悪化」を指摘している。ただ、これは一部論者が主張する「大虐殺」の伏線としてではなく、松井が「一件の軍紀違反さえも許さないという強い態度で」(217頁)南京戦に臨んでいたことによるもので、併せて著者は南京で発生した非行のすべてが日本軍によって引き起こされたわけではないことも、先行研究を元に指摘している。そして「涙の訓示」として知られる、翌昭和13年1月30日の慰霊祭後に「南京占領後ノ軍ノ諸不始末」を叱責した訓示についても、「松井の叱責の矛先は一部の軍紀の弛緩に対して向けられているのであって、三十万人とも言われる市民への大虐殺などは想定していない」(241～242頁)と改めて強調している。本書も参考文献に挙げている東中野修道『再現 南京戦』では、松井のもとで個々人の悪行が厳しく罰せられつつも、参謀総長閑院宮載仁親王による同年1月4日付松井司令官宛て「要望」で、「惟フニ一人ノ失態モ全隊ノ真価ヲ左右シ、一隊ノ過誤モ遂ニ全軍ノ聖業ヲ傷ツクルニ至ラン」と書かれていたことも指摘されており¹¹、要するに日本軍の本来の軍紀が厳し過ぎたことによる言葉の綾が、かえって「虐殺存在派」が都合良く(日本軍にとっては不名誉に)解釈し得る余地を生じているのである。

先行して〈第五章 占領後の南京〉の内容に踏み込んだが、南京戦における(戦闘の規模に比して)小さな瑕疵に対する松井の猛省が、「深い挫折と苦悶」(244頁)の一角を成していることを思うと、評者も日本人として松井の高潔さに対して景仰の念を新たにしているものである。しかし同時に、現実には松井が中国側から「大虐殺」の実行者というプロパガンダに晒され、欧米からは「自らの国益を脅かす好戦的な危険思想」(239頁)の持ち主と見なされたという史実は、この時期の日本そのもののジレンマを象徴していると言えよう。

〈第六章 興亜観音〉〈第七章 東京裁判〉では、日中両国の戦没者慰霊のため「怨親平等」の興亜観音を建立した松井が、戦後は一転して「戦犯」指名を受ける経緯が示されている。昭和20年11月12日にアチソン駐日政治顧問がバーンズ国務長官に指示した戦犯リストの中で、松井が「陸軍過激派のリーダー。南京大虐殺の際、パナイ号、レディバード号事件を起こす」と記されていたことが本書でも引用されているが(275頁)、今でもこれが(反米派も含めた)通俗的理解となっていることを考えると、東京裁判の土台である一方的な戦勝国史観が80年を経ても健在であることを、改めて痛感する。この裁判と並行して、「松井が戦前より最も懸念していた」中国の共産化の「その危惧が現実のものになろうとしていた」(279頁)という指摘は、戦勝諸国が共産主義という世界平和にとっての最たる脅威を放置して、事後法による「演劇」(317頁、上代琢禅弁護人の表現)に興じていたことに対し、切なる反省を求めているようで興味深い。教誨師の花山信勝が著した『巢鴨の生と死』より引用されている通り、南京でのごく一部の兵の暴行であっても「私だけでもこういう結果(評者註:戦犯として処刑)になるということは、当時の軍人達に一人でも多く、

深い反省を与えるという意味で大変に嬉しい」と談じた松井の「中国への広大無辺な思慕や厚情は、こんこんと湧き出る泉の如く、最期まで枯渇することを知らない」（328頁）とする著者の表現からは、逆説的に「日中友好論者」松井の無念が感じられてならない。たとえば、「松井は『大東亜戦争』の失敗と『失ひたる幾百万同胞の鮮血』を悔いることなく、戦後もなお大アジア主義運動の持続を求めている。しかし、日中戦争を正当化するために展開した自らの政治的見解については一切触れることはなかった。というよりも、過去を清算することなく大アジア主義運動の持続を願ったのである」¹²といった類の従来の所論は、その辺りを極度に軽視しているといえよう。

〈最終章 歿後〉では、松井の養女である久江が跡継ぎもなく亡くなったことを記し、「余の一家は現在の文子（評者註：松井の妻）、久江の後断絶せしむべし」という「松井の遺言は、こうして守られたことになる」という静かな悲哀をもって本書を締めている。遺言の真意を確認すべくもないが、松井石根という一軍人の生涯という枠を超えて、大東亜戦争や日中関係史について再考する機会を得たであろう本書の読者も、いつまでも「断絶」しないのは戦後の偏向した歴史観だったのだと嘆息するかもしれない。

本書については、以下の2点の特長を挙げることができよう。一つ目は、本書に登場する軍人や政治家個人について、著者が鋭意その思想や背景にも迫っている点である。戦争が国家権力による営為である一方で、個々人の意識や行動の集積でもあることを考えれば、松井以外の人物についても、様々な制約がある中で独自の史料発掘に基づく考察を心掛けているところに敬意を表したい。

二つ目は、メディア発信において極度の慎重さが求められる「南京事件」に関わる論点について、努めて予断や偏見無く書かれている点。「大虐殺」が有ったか無かったかという、ある意味「大虐殺が有った」論側の土俵に載せられた議論を超えて、著者が直接取材した南京戦参加者の証言も踏まえ、「そもそも南京戦／南京占領とはどのようなものであったか」というスタンスは重要である。たとえば著者は、前著『戦時演芸慰問団「わらわし隊」の記録』¹³においても、次のように指摘している。「わらわし隊が慰問演芸のために南京に滞在した昭和十三年一月二二・二七という時期は、ちょうど『何千という婦人が強姦され、十万以上の人々が殺害され、無数の財産が盗まれたり、焼かれたりした』まさにその最中ということになる」¹⁴。この「わらわし隊」は、戦後まさに「南京大虐殺」の存在を発信し続けてきた朝日新聞が主催したものであったが、南京に残留した日本兵約4000人をもって収容人員2500人の国民大会堂（現：南京人民大会堂）が連日満員となっていたことにも触れ¹⁵、そもそも南京戦／日本軍の南京占領下で何十万という「大虐殺」がそもそも起こり得るのかと問うた。これは、日本がどのような戦争をしていたかという根源的な論点にもつながるものである。

肝心なのは、これらが歴史認識問題の展開を含めて、今後我が国が厳しい国際社会で生き抜くための教訓にもなっているということである。まさに〈復刻版あとがき〉で「共産党独裁下にある中国が、今や国際社会の中心を担う存在にまでなり、世界の平和や地域の安寧を脅かしている現況を見ると、『中国の共産化』が招く危険性に警鐘を鳴らし続けた松井の先見性は、今こそ見直されるべきであろう」（357頁）とある通りで、「南京事件」や東京裁判についての従来の議論により、日本人も歴史上そして現今の共産主義の脅威

から目を逸らし続けてきたことについて、本書の読者も強い危機意識をもってくれるのではないか。

著者は「南京事件」以外でも近代史の論点として、近年の学術研究動向を踏まえつつ、張作霖爆殺事件についてソ連陸軍特務機関による犯行説もあること（59頁）を指摘している。また従来の“日本悪玉”説がいまだ通用する中、教科書や一般書で看過されがちな、極東国際軍事裁判でも証拠とされた「田中上奏文」が偽書であること（54頁）、盧溝橋事件の際に日本軍（支那駐屯軍）は国際条約に基づき合法的に駐留していたこと（92頁）、第二次上海事変に際してドイツ軍事顧問団が中国軍を指導していたこと（97頁）等についても逐一説明を加えているのは、一般読者にとって有用であろう。評者のように歴史学界に身を置く者も、国史叙述の際、本来こうした丁寧な説明を心掛けることが求められていることを、本書を通読して改めて痛感した次第である。

（育鵬社、令和6年）

註

- 1 早瀬利之『将軍の真実—南京事件 松井石根人物伝—』（光人社、平成11年）、のち文庫化。
- 2 早瀬利之『南京戦の真実—松井石根将軍の無念—』（光人社NF文庫、平成19年）、15頁。
- 3 同前、387頁。
- 4 松浦正孝『「大東亜戦争」はなぜ起きたのか—汎アジア主義の政治経済史—』（名古屋大学出版会、平成22年）504頁。
- 5 同前、608～609頁。
- 6 同前、835頁
- 7 野村幸一郎『東京裁判への思想課題—アジアへのまなざし—』（新典社、令和3年）100頁。
- 8 同前、99頁。
- 9 野村幸一郎『松井石根 アジア主義論集』（新典社、平成29年）12頁
- 10 同前、290頁
- 11 東中野修道『再現 南京戦』（草思社、平成19年）350頁。
- 12 嵯峨隆『アジア主義全史』（筑摩選書、令和2年）262頁
- 13 早坂隆『戦時演芸慰問団「わらわし隊」の記録—芸人たちが見た日中戦争—』（平成20年、中央公論新社）、のち文庫化。
- 14 早坂隆『戦時演芸慰問団「わらわし隊」の記録—芸人たちが見た日中戦争—』（平成22年、中公文庫）163頁。
- 15 同前、165頁。